

は八名が入っている。その意味でも、梅岩は代表的日本人の一人であると言えよう。

『尊徳・梅岩』西晋一郎著

この本は七万字を超える大作であるが、一字の無駄もなく力が漲り、両者への尊崇の念がほとばしる名著だ（インターネット「国会図書館デジタルコレクション」で読むことができる）。

同書より精粹を引用する（傍線筆者）。

梅岩は儉約の二字と知心の二字とを掲げて着手の処を示すと共に、至上の樂地に導かんことを力めた。

・儉約の二字を掲げた訳は当時文化の弊たる奢侈を斥けるしりぞことを通して私欲を遠ざけて日常生活を正道順路に導かんがためであり、知心は世智聰弁を以って、博識才学を以って、思慮分別を以って、達せられないところのもの、只心を尽くして始めて得られる所のものとした。

・梅岩は最も通俗の講説をなすことを宗としながら、他一面、最も通俗に遠き知心の工夫を要求したのは、知心が却って実行の近道であると信じたからである。

梅岩の語る徳目は他にも、正直、勤勉、孝行、仁義、利他などを掲げられるが西先生はそれらを「儉約」の一つにまとめられた。梅岩は儉約を説き実践的学問の端緒となした。

梅岩の言う学問とは「人倫を明らかにし、身を敬つとみ、義をもって君を貴び、仁愛を以って父母に事え、信を以って友に交わり、広く人を愛し、貧窮の人をあわれ愍み、功あれども伐ほらず、万事約を守り、家業に疎からず、入るを量つて出だすことを知り、法を守りて家を治める」ことを言う」と西先生は強調している。

『尊徳・梅岩』より引用を続ける。

・石門心学を開いた石田梅岩は享保年間の後期からその講説を始めてその死するまで凡そ十五年間継続し、その間

に幾多の弟子も出来、中には秀でた者もあって、その派が諸方に広がり大に教化を輔けた。我が国教化の歴史に於いてこの心学は偉大なる存在であり、実に尊敬に堪えざる所のものである。

西語録に「父母の恩の有無厚薄を問わない。父母即恩」がある。梅岩も「父母の是非を論ずるものにあらず」と述べていて、孝徳面で両者の親和性を強く感ずる。

西先生は「日本人としては珍しく徹底した方で、梅岩先生のような生活はできないね」と森先生を諭されたという。日常の礼節を尊んだ西先生が、梅岩を景仰せられた理由は「梅岩は京都に居て神道に志し、禪儒に学んで道を得たが、その学問の成就是翻って先に学んだ神道を一段生命あらしめた」ところが、琴線に触れたのであろう。

（参考文献『人倫の道』西晋一郎語録）

致知出版社、寺田一清編

（続）

（〒636 044 奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺西3-5-8）